CO·OP News Letter

2024 年 4 月 19 日

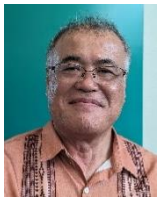
日本生協連 平和の活動　vol.2

～毎年春に開催「ピースアクション in オキナワ」
全国から沖縄に生協組合員が集い、沖縄戦や基地について考える 3 日間～

「平和とよりよい生活のために」―日本生活協同組合連合会（略称：日本生協連、代表理事会長：土屋　敏夫）は設立にあたって“協同組合は平和なくしては存立できない”との思いで、この理念を掲げました。この理念のもと、平和活動「ピースアクション」に取り組んでいます。ピースアクションは、戦争・被爆体験の継承や、世界のさまざまな戦争や紛争、基地問題、憲法など、多角的なテーマで平和を考える生協独自の取り組みです。学んだことを参加者が地元に持ち帰り、暮らしの中で平和について考える機会を広げていこうという狙いです。毎年広島、長崎、沖縄で学習講演会や、全国の生協組合員が集う交流会などを開催しています。近年は、広島・長崎で毎回延べ 3000 人以上、沖縄で 200 人以上の参加があります。

今号では、沖縄戦の実相と現在の沖縄が抱える基地問題を学び平和について考える機会として、毎年春に行われている「ピースアクション in オキナワ」についてお伝えします。

若い世代が平和について学ぶ意義とは？一人一人が動き出せるような取り組みで平和を目指し続けていく



沖縄県生協連
代表理事　専務理事
東江（あがりえ）　建 氏
※ご取材可能です。

住民を巻き込んだ地上戦となった沖縄戦の歴史を学ぶことは、とても大切なことです。戦争体験者のお話を聞き戦跡を訪ね、ガマ(※)に入ってその空気感など、五感で理解が深まる貴重な機会と言えます。

沖縄は戦後 27 年間の米軍統治の後、日本復帰しても今なお多くの米軍基地を抱え、事件事故が絶えない状況です。また日本を取り巻く情勢の下、基地機能の強化や新たな基地建設といった安全保障の現状を見る事ができます。

私たち生協は過去の反省から「平和とよりよい生活」の理念を掲げて活動を広げています。そうした意味でも、沖縄の現地で戦跡や基地を訪ね、目で見て触れて感じる事は、とっても重要だと思います。沖縄県生協連もその開催に努めていきたいと思っています。

※沖縄本島南部に多くみられる自然洞窟のことで、沖縄戦では住民の避難場所になりました。

2024 年 3 月 27 日から 29 日までの 3 日間、日本生協連と沖縄県生協連は、「ピースアクション in オキナワ」を開催しました。41 回目となる今年は、「沖縄から学ぶ過去・現在・未来」をテーマに実施しました。コロナ禍以前と同規模となる、27 都道府県の 38 生協 217 人の組合員・役職員が沖縄に集まり、学習講演会とフィールドワークに参加しました。

1 日目：学習講演会

琉球大学教育学部教授の山口剛史（たけし）さんから、「沖縄戦・在沖米軍基地から平和を考える」というテーマで講演いただきました。沖縄戦で住民がどのように亡くなったか、米軍基地がどのように使われているのかなどをクイズ形式で解説していきました。

「沖縄で平和を考えるとは、軍隊について考えること。沖縄の過去と現在から学び、軍隊や基地について考えてほしい」「非暴力、不服従という市民的な抵抗を重ねてきた点に沖縄の基地反対運動の根強さがある。いかに平和を平和的な方法でつくりあげることができるのかを考えていかなければならない。どのように平和を作っていけば良いのか、沖縄の地を歩きながら考えてみてほしい」

琉球大学教育学部教授
山口剛史さん

Q.――若い世代や子どもたちが平和について学ぶ意義は何でしょうか？

A.「戦争をなくすまであと何百年、何千年かかるか分からない。
しかし、その可能性を子どもたちが考えてみることです」

続いて、「那覇市繁多川（はんたがわ）の住民が見た沖縄戦」と題して、首里城に程近い那覇市繁多川地区の住民が経験した沖縄戦について、同地区公民館館長を務める南信乃介さんから講演いただきました。同地区の住民は沖縄戦の最中、軍や行政機関によってガマから追われ、南部など各地を転々とするなかで、多くの人が命を落としました。

「繁多川にはガマがたくさんあり、戦時中はガマを利用して暮らしていた。そこで赤ちゃんが産まれたり、住民が犠牲になったり、けが人を置いていかざるを得なかったりした。実際にあったそうしたことを想像しながらフィールドワークをしてほしい」
「『色々な国の人と出会って語り合いなさい』という地域の沖縄戦経験者からの言葉に後押しされて、エジプトに公民館を作る運動をしている。みなさんとも一緒に平和な社会作りができれば」

那覇市繁多川地区公民館館長
南信乃介さん

2・3日目：フィールドワーク

2 日目と 3 日目のフィールドワークでは大型バスに分乗し、辺野古、嘉数高台・普天間基地、糸数豪（アブチラガマ）、平和祈念公園、ひめゆりの塔などの戦跡・基地を回りました。参加者は、平和ガイドの説明を聞きながら、沖縄戦と基地問題についての学びを深めました。

平和の礎

瀬嵩の浜

嘉数高台・普天間基地

チビチリガマ

アブチラガマ（糸数豪）

日頃、広島で平和公園での碑めぐりガイド、平和資料館での語り部の活動をおこなっている、大学 1 年生の山本芽依さんは「沖縄戦のことはあまり知らなかった。一番知れて良かったのは沖縄の人が基地についてどう思っているかを知れたこと。基地反対運動などその理由を深く知る事ができた。『基地があることによる不安な気持ちを、後世にも残していなかいといけないのか』というガイドさんの言葉を聞いて、合点がいった。」
「長崎、東京、沖縄など各地で被害があったが、広島で生まれ育ったので広島のことしか知らなかった。広島でガイドをするなかで、広島に関する知識だけでは不十分だと思っていたので、沖縄のことを知れて良かった。」
と熱心に話してくれました。

アブチラガマで折り鶴を奉納する山本さん
（中央）

■参加者の感想

「沖縄は海がきれいなイメージがあったが、その裏にある歴史を学ぶことができて良かった」

「山口先生の講演を聞き、爆弾の破片でも死に繋がる事を初めて知りました。また破片の実物も触る事ができ、重さを体感する事ができとてもよかったです。」

「体験者の『伝えなければ無かったことになる』との気持ち、内臓が引きちぎられるほどの思いで語ってくれた体験を聞く機会に参加して勉強になりました。」

「過去の戦争が今の状況を作り、70 年を超える時を経てなお沖縄の人々の生活を苦しめていることに悲しみを覚えました。報道の中だけでは見えてこない事実があることに気づかされました」

ピースアクションは一部の企画を除いて、生協の組合員はもちろん、そうでない方の参加、視聴も可能で、参加無料です。戦争・被爆の実相や当事者の思いに触れることができるピースアクションを通して、一人一人が動き出せるような取り組みで平和を目指し続けていきたいと考えています。

※今後も日本生協連・各会員生協の平和の取り組みについて、発信していきます。

日本生協連　平和の活動　vol.0　～「非力であっても無力ではない」―戦後 80 年と生協がつくる平和～

日本生協連　平和の活動　vol.1　～「ビキニ事件」をきっかけにまき起こった原水爆禁止署名運動。そのなかで生協が果たした役割と「第五福竜丸エンジン保存運動」～

＜お問い合わせ先＞
日本生協連広報部　加藤・近藤
TEL：03-5778-8106　E-mail：pr@jccu.coop